

氏名	藤原 あや		
学位の種類	博士（障害科学）		
学位記番号	博甲第 8874 号		
学位授与年月	平成 30年 12月 31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	保育場面における自閉スペクトラム症児の社会的遊び に関する研究—生態学的調査に基づく遊びの選定と 指導—		
主査	筑波大学教授	博士（教育学）	園山繁樹
副査	筑波大学教授	教育学博士	原島恒夫
副査	筑波大学准教授	博士（障害科学）	米田宏樹
副査	千葉大学准教授	博士（教育学）	真鍋 健

論文の内容の要旨

藤原あや氏の博士學位論文は、就学前の自閉スペクトラム症児を対象に、幼稚園等の保育場面における生態学的調査に基づく社会的遊びの選定と指導の効果を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第1章で著者は、自閉スペクトラム症児の幼児期における社会的遊び(social play)の困難さ、及び自閉スペクトラム症児の社会的遊びの指導の現状と課題について、内外の先行研究に基づいて検討している。一般には3歳から4歳にかけて子どもを遊び相手とした社会的遊びが見られるようになるが、自閉スペクトラム症児は社会性やコミュニケーションにおける困難、及び創造性や想像性の弱さがあることにより、子どもを遊び相手とした遊びが少ないことを著者は指摘している。そして、自閉スペクトラム症児を対象とした社会的遊びスキルの指導では、他の遊び相手や遊び場面への般化が課題とされていること、保育場面などの自然な環境の中で直接的かつ組織的に遊びスキルを教える必要があることを研究課題として述べている。また著者は、保育場面で社会的遊びの指導を行う際には、保育環境(活動・遊びの種類、保育室の設定、保育者のかかわりなど)が子どもの行動や遊びに影響を及ぼし、それらの保育環境を考慮した遊びの選定や指導が必要であると述べている。最後に、本研究の目的として著者は、保育場面(幼稚園、保育所、認定こども園)での社会的遊びの指導について、子どもの行動に影響を及ぼす環境に関する情報を把握する生態学的調査の重要性を指摘し、生態学的調査による遊びの選定と指導を実証的に明らかにすることを述べている。

第2章で著者は、まず第1節(研究1)で生態学的調査の予備的検討と生態学的調査に基づく遊びの選定と指導の効果について検討している。幼稚園に在籍する自閉スペクトラム症児1名を対象に、先行研究から導き出された生態学的調査【試作版】を実施し、三つの遊びを選定した。そして、それらの遊びを大学教育相談室と幼稚園において指導した。その結果、対象児は大学教育相談室で二つの社会的遊びスキルを獲得し、幼稚園でも他児との社会的遊びが促進されたことをデータに基

づいて明らかにしている。この結果は、生態学的調査に基づく遊びの選定は、保育場面において対象児が参加できる遊びの選定を可能にすることを示唆していると、著者は考察している。

第2節(研究2)で著者は、自閉スペクトラム症児3名を対象に、研究1の結果に基づいて再構成した生態学的調査【改訂版】を各保育場面において実施し、社会的遊びの選定と指導を行った。その結果、標的とした遊びは全て保育場面で実施でき、各対象児はほとんどの遊びスキルを獲得したことを、データに基づいて明らかにしている。これらの結果に基づいて著者は、標的となる遊びの選定において、各対象児に共通して重要であると考えられたのは、「対象児の遊びの発達段階」や「対象児の参加できる遊びの特徴」を考慮する、及び「対象児が遂行できる単位行動が多く含まれている」ことや「他児も楽しむことができる」ことなどであると考察している。そして、対象児と他児の遊びの発達段階が大きく変わらない場合には「対象児の生活年齢」や「他児の遊び」、「他児の遊びの発達段階」を、対象児と他児の遊びの発達段階が異なる場合には「他児との発達段階の差の影響を受けにくい」ことを考慮する必要があると考察している。

第3章で著者は、まず第1節(研究3)において、研究1と研究2の結果から遊びの選定において考慮すべき項目を社会的遊びの選定条件【外部支援者用】に整理し、これらの条件に基づく遊びの選定と指導を自閉スペクトラム症児1名に実施した。その結果、著者は、対象児は標的とした遊びに参加し、他児との社会的遊びの時間と相互交渉数が増加したことを示した。この結果から著者は、社会的遊びの選定条件に基づく遊びの選定と指導の効果が示されたと考察し、標的とした遊びに対する他児の自発的な参加や、他児から遊びを開始する言動も観察されたことを報告している。

第2節(研究4)で著者は、研究3と同じ対象児に、保育者による社会的遊びの選定条件に基づく遊びの選定と指導を実施した。保育者は、研究3の選定条件【外部支援者用】を修正した選定条件【保育者用】を使用し、三つの遊びを選定し、保育場面で指導を行った。その結果、対象児は二つの遊びに比較的少ない援助で参加でき、他児との遊び時間が増加したことを示した。これらの結果から著者は、選定条件に基づく遊びの選定と指導は保育者にも可能であることが示唆されたが、異なる自閉スペクトラム症児や保育者、保育場面においても本研究の社会的遊びの生態学的調査と選定条件に基づく選定と指導の効果を検証する必要があることを課題として挙げている。

第4章で著者は総合考察を行い、その中で、研究1から研究4の結果に基づいて保育場面における社会的遊びの選定と指導のためのフォーマットを提案している。本研究における生態学的調査は、保育場面における対象児の遊びや、他児の遊び、保育者の人数やかかわり、遊び場の環境、指導計画について把握し、これらの情報は標的となる遊びを規定し、対象児と保育場面に適した遊びの選定に役立ったと、著者は考察している。そして、保育場面で他児を遊び相手として指導を行うことで、その指導のプロセス自体が対象児にとって他児との遊びの機会となっていたことから、保育場面における社会的遊びの指導の意義があったと考察を加えている。今後の課題として著者は、保育場面における社会的遊びの選定と指導のフォーマットを使用し、知的発達や障害の程度が異なる自閉スペクトラム症児、及び様々な保育場面における保育者を対象にその効果を検証することを挙げ、それにより提案したフォーマットの保育場面での活用可能性を高めることができると述べている。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文で著者の藤原あや氏は、幼稚園等の保育場面で社会的遊びが困難とされる自閉スペクトラム症児に対し、指導の標的とする遊びを選定し、保育場面で実際に指導を行い、その効果を実証的に明らかにしている。本研究の独創性は、指導する遊びを選定する際に生態学的調査の手法を用いることで、対象児が獲得しやすく、かつ、保育場面で他児との遊びが生じやすい遊びとそのスキルを導き出したことである。このような手法をとることで、対象となった子どもにとって日常場面の一つである保育場면을様々な学習ができる場面に再構成することができ、今後の幼児期における自閉スペクトラム症児の教育と保育について貴重な示唆を与えていると評価できる。

平成30年11月5日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(障害科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。